

## 宝酒造

# 「お茶割り」が好調

宝酒造のお茶割りは好調だ。本誌が推定した2023年〜25年の「宝焼酎のお茶割りシリーズ」の販売実績は、堅調に伸長している。通年で4フレイバーを展開しているほか、今秋に限定缶として「やわらかほうじ茶割り」(写真左上)も発売した。

宝の「お茶割り」は、1998年に「宝焼酎の烏龍茶割り」(現「宝焼酎の烏龍割り」)、2004年には「Takara 焼酎のやわらかお茶割り」(「同やわらかお茶割り」と長い歴史を持つ。同社で焼酎担当とお茶割りの推進をしてい

る。佃裕之商品第一部企画課長は、昨今のお茶割り市場について紹介し、「お茶割り市場の24年販売規模は前年比157・4%と大きく拡大している。居酒屋で提供されているメニューでも、定番のレモンサワーやウイスキーハイボール以上に、お茶割りを提供する店舗も増えてきている。

世間では、緑茶やウーロン茶が糖質ゼロでヘルシーなイメージから、「お茶割り」という

と、中高年の方が飲んで印象を持たれているかもしれない。しかし、「宝焼

酎のやわらか

お茶割り」の飲用量や頻度を調べたところ、年齢別では20代の飲用量・頻度が増えた・やや増えたという回答が70%以上、30代でも60%を超えるなど、若年層の間で広がり

を見せている。ユーザー構成比も20〜30代が半数を占めている。また、年齢層にお茶割りを飲んだことがあるかの質問を見ると、約52%の方が飲んだことがありと回答。内、焼酎甲類で割ることが多いという回答を得た。増加の要因は、「無炭酸でお腹にたまりにくい」「お茶で割っているの

「お茶割り」は一説によると、静岡などのお茶どころで伝統的に焼酎の「緑茶割り」(静岡割り)が飲まれており、全国的には1980年代に起きたチューハイブームを経て徐々に広がりを見せていった。そして、この時期に缶入りの烏龍茶や緑茶飲料が誕生したことが、烏龍割りや緑茶割りなど「お茶割り」の浸透に強く関係しているといわれている。



最近、弊社が着目しているのは「宇治抹茶」。近年、抹茶を含む日本茶が国内だけでなく海外にも広がりをみせている。日本食ブームの影響や健康志向の高まりによって、日本茶の輸出量は10年で2倍強に増えている。旺盛なインバウンド需要も一つの要因として、評価の高い宇治抹茶の品薄状態も続いている。

ノン・フルフラール)が含まれており、お茶割りへの適性度がかなり高い。おすすめは「極上(宝焼酎)・お茶」を1・5の割合。緑茶だけではなく、ほうじ茶・烏龍茶・紅茶などで割ると楽しめる。割材の味を生かしながら焼酎の美味しさをしっかりと感じられる酒質を実現した本商品は、若者に人気の飲食店でも楽しまれ

## ソフトアルコールから焼酎甲類の増進を目指す

ソフトアルコール

と低くて飲みやすい」「お茶という素材自体に良いイメージがある」「お茶自体が健康に合う」「飲み会の締めによく飲んでい」が挙げられる。

本シリーズは、東京の下

北沢、渋谷、新宿など若者が多く集まるエリアでよく売れており、若年層からの支持を得ていることが伺える。もともと関東で親しまれていた本シリーズだが、現在では関西にも販売エリアが広がっており、大阪のアメリカ村などでも好調な売れ行きを見せている。

国内では、飲食店での「抹茶ハイ」メニュー掲載数は19年比で約3倍に増加。「緑茶」「抹茶」がセットのメニューが進んでいる。弊社も宇治抹茶を使用した「宝焼酎の抹茶ハイ」を展開中。

「無着色で抹茶本来の美しい緑色」が特徴で、インパクトも必要は見込まれず、わじわと人気が出ている。コーヒーや紅茶のように、抹茶も世界的な嗜好品になりつつあるので、今後もさらなる拡大が見込めるだろう。

お茶割りはあくまでも飲み方。お茶割りシリーズを展開していくとともに、お茶と割るのに適している「極上(宝焼酎)」を推奨していきたい。お茶の香気成分と樽貯蔵熟成種は同じ成分(バニリン・ダメセ

「お茶割り」の展開を経て、

焼酎甲類も発展していけるように努力を重ねたい」と語った。

### 【記者の目】

先日、渋谷・道玄坂近くに行くことがあったので、近隣のコンビニを回った。棚には、お茶割りRTD缶が数多く陳列されており、需要が多くあることがわかる(写真右下)。渋谷だけではなく、町中を歩いているとお茶割りを購入するシーンを見る機会が増えた。年齢層も20代〜50代と幅広い層がお茶割り缶を楽しんでいる光景を見ると、着実に「お茶割り文化」が浸透しつつあると実感する。話を聞いてみると、缶だけではなく、お茶と焼酎甲類の紙パックやびんを買って、自分で割るという若者もいた。また、近年某ファミリーストランでは焼酎のボトルキープが可能な店舗が出てきており、店舗に用意されているお茶で割って飲むユーザーもいるそうだ。RTDは無糖やジンソーダ、ハイボールが主流だが、お茶割りも1つの強カテゴリーになる日も遠くないのかもしれない。

(島崎毅史)